首書
源氏物語
薄雲　十九

富山縣志田文庫藏書

石曜文庫

十九

○河 巻名 入日さす峯にたなひく薄雲ハ物思ふ袖に色やまかへる
○花 以哥為巻名又詞云雲のうすくわたれるかにひ色なるをとあり詞をもとゝして名と
せるともいふへきにや源氏の卅歳冬より卅一歳の秋までの事見えたり

○川ちかきの住居 花 是ハ大井の里の事也
○うきのえなるへき 細 明石上の心也明石の古へを
なるれきて又源氏も絶くうし給へハ也
○君をあると 巴抄 源氏を也二条院の東院へ
とおかりめもうや
○ちかき所 河 後撰 かゝるなかにはねきろ
女に心かけたる男のさとちかくてひんなき所
ちあれハ心にハ有なからえ立よらぬと云けれハ
所をえて待をるに見えてさうきれハ女 宿えて
待かも見えてするなれハつらき所の多を有なる
細 此詞書其外に叶ひてもなこもつき
所多かるへしと也明石上の心ハ二条院にうつりて
を源氏の同し家にうれしからぬてハうての心也
○いかにいひて 河 拾遺 限ての後さへ人のつら
からハいかにいひてかねをもなくへき
○さらハこの 或抄 源氏よりの給ふ詞也
○思心あさきハ 弄 中宮の事とおかれる心也
○そなたに 細 紫上也

冬になりゆくまゝに川づらの住
ゐいとゞ心ぼそさまさりて。
うはのそらなる心ちのみしつゝ
あかしくらすを。きみもなをかく
てハえすぐさじ。かのちかき所
におもひたちねとすゝめ給へど。つら
きところおほくこゝろみはてんも
のこりなきこゝちすべきを。いかに
いひてかなどいふやうにおもひ乱
れたり。さらハこのわかぎみを。かくて
びんなきことなり。おもふこゝろあれ
ばかたじけなし。たいにきゝおきて

○はかまぎの　弄　此袴着の事ハ明石姫君の事也女人の勘例可有之一勘大略三歳時有之但五歳以上例又勿論也花山院ハ九歳着袴云々
○まめやかに　孟　源氏の明石上にかたらひ給ふ也
○さおぼすらん　細　明石上の心也紫上の養子にし給へきなる也
○あらためて　或抄　明石上詞也　細　紫上の御子にし給ふともまことの御母となりてハ人ハ思まじきと也
○ことわりにハ　或抄　源氏の詞也　一段うしろやすかるへきと也
○うしろやすからぬ　細　自然ハまた母なとのさとりとるハよろしからぬと源氏の詞也
○かしこにハ　花　紫上の腹に子なきを云

ほのぼのゆかしがると、しばし見ならはさせて、はかまぎのことどもも人しれぬさまならず、しなさんとなんおもふと、まめやかにかたらひ給ふ。さおぼすらんとおもひわたる事なれバ、いとゞむねつぶれぬ。あらためてやむごとなきかたにもてなされ給ふとも、人のもりきこえんことなかなかにや、つくろひがたくおぼされんとて、はなちがたくおもひたる、ことわりにはあれど、うしろやすからぬかたにや、などはなうたがひ給ひそ。

○前斎宮の　細　紫上ハ年比御子なきさ故に前斎宮をも養子にし給しと也今紫上ハ廿四歳也前斎宮ハ廿三歳也さて名ハかりの御子にし給也
○女君の　細　紫上の有様をかたり給ふ也
○いにしへハ　細　明石上の心也源氏の御心ハさだまるかたの人にも心をとめ給ましく見えしにかくしづまり給ふ心と紫上ひとりにとめ給ハいかやうの人にかとゆかしくと也

年へぬれど、かゝる人もなきが、さう〴〵しくおぼゆるまゝに、前斎宮のおとなびものし給ふをだに、あながちにあつかひきこゆめれバ、まして、かくにくみがたげなるほどを、おろかには見はなつまじきこゝろばへになど、女ぎみの御ありさまのおもふやうなるもかたり給ふ。げにいにしへハいかばかりのことにさだまり給べきにかと、つてにもほのきこえし御こゝろの、なごりなくしづまり給へるハ、おぼろ

○かずならぬ人の　細　明石上卑下也

○人もめざましと　或抄　紫上のねたみ思さんと
ありてハと也

○おひさきとほき人　細　姫君也

○かの御心に　巴抄　つゐにハ姫君も紫上の心にまかせ
よるべからんと也

○さりとならハ　万水　さあらハと云詞也

○何心なきさ　巴抄　姫君の何心もなきをさなき
紫上へゆづらんとの思案也

けの御すくせにもあらず．人の御ありさまもこゝらの御中にはすぐれ給へるにこそはとおもひやられて．かずならぬ人のならびきこゆべきおぼえにもあらぬを．さすがにたちいでゝ人もめざましとおぼすことやあらん．わが身はとてもかくてもおなじこと．おひさきとほき人の御うへもつひにはかの御心にかゝるべきにこそあめれ．さりとならばげにかう何心なきほどにやゆづりきこえましとおもふ．又てをはなち

○何につけてか　細　姫君をとられてハ源氏の
立よらるゝも有まじきと也

○身のうきこと　或抄　我身のかずならぬゆへハ此
物思ひもある也　孟　是まて明石上の心也

尼君　細　遠慮ある人也

○あぢきなし　或抄　是より尼君詞明石上へ
教訓せらるゝ也

○あさくおぼして　万水　源氏のかるくハはか
らひ給ハじと也

てうしろめたからんこと．つれ〴〵もなぐさむかたなくてはいかゞあかしくらすべからん．何につけてかたまさかの御たちよりもあらんなどさま〴〵おもひみだるゝにも身のうき事かぎりなし．あまぎみおもひやりふかき人にて．あぢきなし．見たてまつらざらんことはいとむねいたかりぬべけれど．つひにこの御ためによかるべからんことをこそおもはめ．浅くおぼしてのたまふことにはあらじ．たゞうちたのみきこえてわたしたてまつり

○母かたからこそ　河　朱雀院ハ延喜第十一村上天皇ハ第十四皇子にておはしませとも此両皇の御母中宮温子昭宣公女たりしによりて即位有き西宮左大臣兼明親王なとハ第一皇子にて賢才ありしかと更衣腹なりし故に人臣に成給ひし也是其例を云にや（下略）

○古大納言の　或抄　大臣にてなかりし故に桐壷更衣といはれて女御にもえなり給はさりし也　巴抄　三条院の御時后に大納言の女を立給ふ時贈太政大臣になし給ひし例ある也

○なほさしむかひ　細　なか甚至也

○おとりのところ　細　落胤腹也

○人をおもひ　或抄　外腹の子ハ世上あなとろしむる也又おやも本臺腹の子のやうにハおもひくみ給はぬ也

○是ハやんことなき　細　可然御腹より子出き給て明石姫君ハけおされぬへきと也

○おやにも　或抄　おやのかしつく子ハ世上にもおとしめらるましきと也

○かゝる深山　万水　そのはえも大井にてハはへあるましきと也

○きこえ給へとをしふ　万水　此段皆尼君の明石上に教訓の詞也

○さかしき人乃　河　ゆうくらんのとハうらへて只ひろき心のうらをもしらするさる　或抄　ものうらをとふる也

給てよ。はゝかたからこそみかど
の御こもきはゞにおはすめれ。この
おとゞのきみの世にふたつなき御
ありさまながら世につかへ給ふハ。古
大納言の今ひときざみなりおとり給
ひて。更衣ばらといはれ給ひし
けぢめにこそおはすめれ。まして
人はなずらふべきことにもあらず。
みこたちおとゞの御はらといへど。
なほさしむかひたるおとりのところ
には。人もおもひおとし。おやの御もて
なしもえひとしからぬ物なり。まして
これハやんごとなき御かた〴〵にかゝる
人出ものし給はゞ。こよなくけされ
給ひなん。ほど〴〵につけておやにも
ひとふしもてかしづかれぬる人こそ。
やがておとしめられぬはじめとハな
れ。御はかまぎのほどもいみじき
こゝろをつくすとも。かゝるみやま
がくれにてハ何のはえかあらん。たゞ
まかせきこえ給て。もてなし給ん
ありさまをもきゝ給へとをしふ。
さかしき人のこゝろのうらどもにも。
ものとはせなどするにも。猶

○思ひよそへ　巴抄　明石上のおもむき心よりいへし
○おもへん西乃　細　明石上の思へん西をとおりひなて御袴着まゐらせての事也
○よろづのこと　或抄　明石上返事の文言也　細　我身のうへひかるきみまへてもいふと也又さりとて手をとるうちてもいふと也やるよいへるハ思ひよりかるよし源氏の思ふ事也
○立まじりそかなよ　或抄　手をとるうちてもいふとさいひて母のおひかひて二条院ぞまいりてんよましろんもいふと也
○目なれしこせ　孟　姫君を二条院へまいらせて後へき目也
○まうちけずし　万水　明石上の心也

ぶてハまゐるべしめでといへども
よろつおもりなもちおぼゆ。
おもへらるのいとおしきおもひ
もえのことをでうちたまふのと
いかやうのものあへうけつかまつ
のしりひかるきみうぐてすまて
ハずおもひきちもいとおしくべ
おぼしけるを。こなたのうちてはぶ
人もくへいやしからを。いと
おそれなおぼしと。見そじと思ぼしを
まのびやかきうつきところのこと
をもちてまゐらせ。とるうちはたさん

○君の御ため　万水　姫君のため也
○いたはしく　弄　つくろふへしと也
○君とも なく　巴抄　明石上也
○さるへきさまや　細　明石まてそくろしもえんまてそありの御めと也　或抄　乳母詞也

ことハなをいとあされなおぼゆるど。
きみの御きもようなるべきこと
をそれでしわんとめのとまもれ
ようさまんとびらきのおほんや
さうちぐをもらるてひそすぐ
きやんさうひつらよいどもぐぎ
なきこえるをそくいつかまじう
おはのつきもここみもなきの
しもまうざまやおぼしめき侯
まてみそてまうちあてゝいど
のれこうぐくのともれぞくるひ
しうおぼしめつきどうちさえ

○つゐにハと　万水　一度ハ明石上も京へ出あらんと也

○思ひの外乃　或抄　紫上の御方へまいらんをハ不慮也これハきしき所のましらひせんをも始ゆ也

○ちくもとを　或抄　源氏卅歳の年也（箋）

○あやしく成くる　万水　明石上の心也

○常よりも　或抄　名残を今より思也

山里にてハよも侍じ。つゐにはと
のえずら思ず。しまそめされく
よおもひの外のまじらひ侍ん
がやもうらども侍づきうかなど
うちなげきてもどくとはゞよし
かとりもなりぬるわるきかぎりぢ
よころばへさまざまておやく
袖ぐもよ地おもひへてもろあかるふ
とちなげきてづよわたあ君
をとぞつくろひてぬきうぢさき
らしうほりわれにきこく
行きゆのきしのこゝずなやむひゞせ

○白きみその　巴抄　明石上乃粧也

○うしろて　或抄　うしろ付さ也

○くきうるさん　或抄　姫宮の事をとりおくのこゝろもんと思ふ也乳母の事を思ふ是也

○やうるすん目　細　行末の事といへり　或抄　姫君を二条院へまいらせてのの事といふ也

○雪ふかき　明石上也　花　心ハ文をそなたよりも絶さずかよへの心也

てきびしさまちらかるぐ
みおどもせぬをあやさへのふり
あどこゝゆりてうつくしきほどの
なまめかしわかさてらず純ろ
やすびうつくしさうぞく。
うぎうふかめへときことあもうく
ゝそおもひすめとゝ思ひさぐ
をうちそひて命みまつる命ま
ていふおもひつゞまうんとらしげ
よふるほそ

雪ふかきみ山のみちははれずとも
なをふミかよへあとたえずして

○雪まなきよ　乳母也　弄　雪はふかくとも
の山なりともかよへと也とかくの
吉野の山よりもなほ奥の類也
○此雪すこし　細　源氏の来り給也
○例ハまち　細　おりからなき詞也
花よの常ハ源氏君を待けにゆきと今日渡て
給ふハ若君の迎へ給ふやとおもひむねつぶるゝ也
○人やりならす　花　人のせさするにもあらさる
○いなひきこえんは　或抄　姫君のことを我や
しひて源氏しんせてまさらんとハの心ま
しき也おもふさまなむねつとむる也
○くやしさ　細　今さらくやしきハ一事両
様なるへきと也
○いとらうたけにて　万水　源氏の御まへにて姫公
の居給ふ也
○そうそうハ　細　なをさりの人ハかくハなかりし
と也明石のさうひなともなりなりきん

りしくのなぐさめのしらなきさて
雪まなきよしのの山をたづねても
心のかよふあとたえめやはといひ
なぐさむ。この雪すこしとけて
わたり給へり。例はまちきこゆるに。
さならんとおぼゆることによりむねうち
つぶれて。人やりならずおぼゆ。我
が心にこそあらめ。いなびきこえん
をしひてやは。あぢきなとおぼゆれ
ど。かろがろしきやうなりとせめ
て思ひかへす。いとうつくしげにてまへ
にゐ給へるを見たまふに。おろかに

なるなりけりと也
○此春より　弄　うなゐをそきのほどなるや
○あまそぎの　弄　さきを尼の髪如しと也
○よその物に　也抄　紫上の子になしきこえんなさ
そと明石上乃心底をおしはかる也
○のたまひあかす　或抄　明也あかしむる心
明石上心次第と心中を明かす
○何か　或抄　明石上詞也　姫君を母のや
しなひさまなく可然さまにもてなし給へと也

は思ひがたかりける人のすくせかなと
おもほす。この春よりおほす（生）みぐし
あまそぎのほどにてゆらゆらとめで
たく。つらつきまみのかをれるほど
などいへばさらなり。よその物に
おもひやらんほどの心のやみを
おしはかりたまふに。いとこゝろぐるしければ。
うちかへしのたまひあかす。なにか
くちをしきみのほどならずだに
もてなしたまはゞときこゆるものから。ねん
じあへずうちなくけはひあはれ
なり。ひめぎみはなに心もなく

○母君みつから　細　明石上ハ常ハ物をさとりたる人也しか唯今ハ別をまへにかくさまに思ひ給ハ尤哀也松風巻にハかりそめにもよそほへしあさとの給ひし時にハかくのみに可思

○かたことの　或抄　嬰児の物いふを云也

○末遠き二葉　明石上也
細　ゆく末を祝したる也

○さりや　細　源氏の心也　或抄上の句の詞のおもひあまりの心おもハ也されハこそ心得あれと明しおく

○生そめし　三の源氏也　花武隈の松ハ二木なれハ明石上と紫上との二人に喩ふるへし　さきの巻に浅根さしゆへやいかにと尼君のいひしをうけてさあて根もふかけれハとよみ給へり
細　花鳥説可然　巴抄説に有て母と姫公をさすへし也

てくるまにのらんことをいそぎ給
よせたる所に母君みづから
いだきて出給へりかたことのこゑハ
いとうつくしうて袖をとらへてのり
給へと引もいみじうおぼえて
すゑとをき二葉の松にひきわかれ
いつか木だかきかげを見るべき
えもいひやらずいみじうなけば
さりやあなくるしとおぼして
生そめしねもふかければ武隈の
松にこまつのちよをならべんのど
かにをとなぐさめ給ふ。さることゝ（明石上心）

○さることとハ　巴抄　さとしもしえさうきうちうへし

○乳母少将　巴抄　一人の名也
或抄　花鳥乳母の名を少将と云とあり一説少将ハ女房也乳母と少将と云々

○はかしあまかつ　河　御劔也不限男女調度也　尼児

○人だまひ　細　供の女房ども也車也
巴抄　副車ヒトダマヒ順和名

○よろしき人乃　細　明石上の方と源氏の召やう給也

○いかにつみやうらんと　細　是ハ皆源氏の心ゝさまし明石上の思へきと也

○ゐ中ひたる　細　きらくしき京の住居ハ今とくのおもひし也

○西おもてを　細　二条院の西おもて也すまひよきやうにしつらひたる也

おもひしづむれどえなんたへざり
ける。めのとせうしやうとてあてやかなる
人ばかりおほんはかしあまがつやうの物
とりてのる。人だまひによろしきわか
人わらはべなどのせて御をくりに
まいらす。みちすがらとまりつる人の
心ぐるしさをいかにつみやうらんと
おぼす。くらうおはしつき
て御車よするよりはなやかに
けはひことなるをゐなかびたる
心ちどもははしたなくてやまじら
はんとおもひつれど西おもてを

○ふるさとの雲ゐ　或抄　西国にて都近きをさ
とみへしなり
○こゝろさへ　万水　紫上の御方をのとも
まいらせらし也
○うちひろけ　或抄　口出（ヒスム）あまりのまへに
をあをく家むする謂也
○山里のつきさく　細　明石上のことをいひやる
る也　或抄　源氏の心也

こよひつゝせなれてちらこさ
いてらどもあらつゞからみへ
させなかりかのこのほかのまハ傍
にしのさこよわさせるとうへを
なかりもらごみハきらうて給
まかりいざきおもわれてあれ
かげんし給ちげごるさそ所
くざりのまいりすずし給ぞや
やうしんらくしてちぎみの御へ
ぬとりしあてらうけぼいら合
こなへぬのとり出てあくさ給ん
まきつゝやうえ給いざこれまく

○そのおひろ　細　符合しる也
○いふかりや花　おほしくハ紫上の御腹よそおは
きしきをするゝさ王子そあらんの心也
○大かた心やすく　巴抄　紫上の御心さるへき
みるさきなとなり
○いかてかくつき　孟　紫上の心也
○とのおほく　或抄　紫上ハ姫君をとりつき
なから外無他事と也

ますていふとおかり方ハいとかし
されどゆくさおほと申かづさ
つくえ給へどのあれるこてちし給
ゆかんいふあそや今のおりふさまざ
るさてん江のまうまいでお事
でとくらおしくおぼさるゝぞハ
えらくうとめてあ給ぶし給
ごおかくさうろやまとおゝき
こうざあるれバくよいとくつさ
むつびはし給へせバいづくも御
きりのえそうしおかりうつ事
あいざさあつひめておいさはそ

○又やむごとなき　巴抄　めのと乳母也

○何ばかりのきはと　細　別に經営もなくてさう也不断公卿殿上人さふらひ又御ちかくさふらひ各とのゐすくしさをいつのまゝれハそれ乃きこのとりなしに見ゆるをいふ也

○御しつらひ　或抄　姫君の御方の御几帳御屛風なと又御調度ともきよらにしつらひさせ給ふといふ

ありさまを見る也

○まのあたりつかうまつる人　弄　明石の姫君につきてまつりつかうまつる女ともの心也人〳〵乃出入候

○こゝさき引ゆひ花　河海に引のせたる昔僻事也別にあるまし

給ひてめのともおのづからちかう
仕うまつるれ何のなかにやむ
ごとなき人のちかなくて参り
給へ何ばかりの際ござへるにだにわかはと
おぼしいたらくことへあげまで新
なめしとおもふくおぼしつらひひなあそ
びのこゝちしてやしうまゐり
まのあたりちかうしてもそのゆかりの
けはひしうまつればおぼつかなみも
こゝぞうさぎひろごみのすまき
ひきゆひ給ふるもいつきぞらう
げさらひて見し給ふ。大井あれ

○身のところり　細　明石上の後悔する也　巴抄　我領状したる故也

○さてそひしり　細　てうさのまゝにて従しきうへてよとまへいひしうされとするさまなる也

○何事を久　細　明石上よりの音信也

○ほかさのへく　或抄　姫君の御方の人〳〵也衣裳をとらする也色あひを賞翫すること

○待とりよろこひ　細　源氏の心也姫君のまゝまゐりてよろこひきこゆる也

○思ひてよゝり　万水　大井へ源氏の御出也

つきそひさぶらふも身のとこ
ろうとるげされてうざそひ
しうわまきごもいとゞうこゞかわ
なきてもとくおぼしつゝき
給ひてこゝまりうるなど
おかれたくもぶひはしえ給ひん。
ぞいくさのへでよかくもかうづめ
て世にまださいろあひなどいひすき
てうちとりやかえ給ちまかなどと
まんもいくさるハそゝ思ふらん
よろしくおしまれバ、そのさらぬ出びに
てまうらつゝまさびこえ給

○女君を　細　紫上也
万水　紫上と姫君の寵愛にて今ハ大弁のす
をう〳〵く給ふなる也
○つゝまし　或抄　姫君にめんじて源氏の院
人ことをゆるし給ふ也
○年をへぬる　花　源氏卅一に成給也
○いとめでゝ　或抄　源氏の栄花をいへり
春の御ゆらきひかりわたりかゝやくしき事
○まゐりつどひ　細　年賀也
○七日のよろこび　花　正月七日の祝と云へし
細　ちとおもくしき人ハ七日なとにまゐり
給ふ也
○引つれ　或抄　其類の人々同道するや

わが明らめありしつぎ〴〵ととく
まゐれはみえて、どうんゝのころ
ぐらしければけふてちごも絶ち
あくつらずがさゝもいまあとよ
えんじやすし給ふらてこ今よ
つゝましや見え給へりぞしもうり
ねらくかろらおかつてぐと
かすさげかりき御ハゆゞぐぞてく
見がゝさわゝなゞう給よひよ
まゐりほどひ給ゑぬ人のおゝる
しきかぞのハ七日の御よろこびぞ
し給ひひきつれ給へるやらん

○わかやかなるハ　巴抄　殿上人也
○うハへハかくてこそあらま　細　天下泰平の時分也其
身くもりてハ皆庭のうちへめぐらめと上
下ひもすさまじき事も此かひ也當時の聖
代といへり
○ひんかしの院ハ　花　花散里東院の西対に
すミ給へり
○近きさかひハ　細　明石上ハ少と遠し是ハ近
きゆへにさいくまとゐなり給也
○うち立とまり　巴抄　大方ハ遠きをいとへとも
此とまりもあるゝ也

きはもなくこゝろすげにみえん
きんだちの人もこゝろのうち
にハおもふことやあんなるべし
かをりふきゆるかぜひろうし
ひんがしのゐんハさらのけうさもき
さ御ハこのまゝわつゝまれきゝ御
まざぶゝねんべけらべのきずゝかぞ
うらげどころづゞひくる
し給よちらゝきるにこよふく
てのごゝろあるハいまのをあぞ
まふとひハりがぞ給へど
よろこびを御りあぞやふかぞと

○此心ゐのとひろき　孟　大やうなる意也　こめきハ巨字也
○うちうち乃　或抄　花散里の心也よろづにをとを
まり給ふとも恨給ふ也是ゟしもての宿
縁まであそばしめとおもやり給也
○うしろやすく　或抄　花散里の大やうなる
心といへり
○こゝろさしの外なる人よ　万水　源氏の御節の外
あつかひも紫上におとらず花散里をとりそだ
給ふと也
○おほかた　万水　紫上と同しくとくまゐる人乃
出入をあつかふと也
○別当なと　巴抄　家司とあるかしらもあり
或抄　東院のよろづをとりさたする役人也
○いやまさ　或抄　花散里の住居に慰を可
然とかめなる也

はえしなハず。さゞれてるがたの
おもひにふにこめきて。かゞりけしきを
ありなる君もそれわたり給へと聞えひ
するつかはりてさまでうしろ
やすくのみふまなるにさま〳〵ハおぼ
かしの外ところをおいかれども。ゆるさ
の外めり人々よおとなるもちなさきよ
かゞずもそれ給ふをおかなり
まうづやかわ〳〵ハ家司じもん
ものりつゝうまつりてべきじとも
ことところすなかくりえれ給ふなる
ごらんずるもおやさもはれわりぬる也。

○山里のつきて　或抄　大井の里也姫公を住し
て給ふらんとおぼしやる也
○さくらの御直衣　花　常の直衣の裏こきす
はうなるを桜色といへり下の桜人乃為に縁
あるなるへし　細　常の冬の御直衣也
万水　表白裏濃蘇芳染也
○まうりり　或抄　紫上へ出かけんとあるこしらへ給也
○御さしぬきのすそよ　河　万葉　こ衣とそてあ
とうつろふを考てきはやかにするなりて
○とりのを出　花　外也簾の外也　一ハ戸也

山ざとのつれ〳〵をもたえずおぼし
やれバ。おほやけわたくしものさはがし
き程すぎてわたり給ふとて。
ろうへにもきこえしらせ給て。
さくらの御なほしにえならぬ御衣
ひきかさねて。たきしめさうぞき
給てまかり申し給ふさま。くまなき
夕日にいとゞしくきよらに見え
給ふを。女ぎみたゞならず見たてま
つりおくり給ふ。姫ぎみハいはけ
なくさしぬきのすそにかゝりて。
したひきこえ給ふほどに。とにもいで

○あきくりえんと河　揚人その舟とくめさるつ
田をとゝめちつてきろ見てくりこんやくやや
あきくりえんやくやてとをとてわたともいで
め遠方よつまうろせるのく也ハあきともさ○とくし
やくや志やともさ○とくやくやや　揚人　催馬呂
○中将の君　万水まゐのうろひれとき紫上事
あつきなひし人也
○舟とむろ方　紫上也　細　揚人の方つて悉
皆よめり明石上を遠方人よすしていへり
○いうつきれて　或抄　此中将も源氏の思ひ人
うきハきれくしき方も
○ゆきて見て哥　源氏也　細　さ○こえハ早く
来んと也　也抄　是も揚人の詞也さやくう
ゐろを明石上備心ろて恨ととやそろろん
と也　さ○ハ實字也
○何すとも　万水　母のきとの須人とも姫君
いとり須ぬゝ方と也

なひのべきれバさらと渡りていと
あきれとおがしさり。こうしら人豊て。
あきくりえん。ごうじときひてお
なよ。さごのうらよ浮りけて。
津都のきみして中のえなへり
　うひとむろそうらくさくへの方く
なれわきくりえんせむとまち
見あはうるねく中書ばいと
身ひやうふかゝきそ
　なてきそわともきねさん体く
よそちくさくへきちろをくとも。
なまめぐくも中よさぞきしわつき

○とちうくく乃　万水　明石上のねきまてさもひめ
君よ見んゆうさと也
○いうよ思ひ　細　紫上の思やうと須也
○うらきうそハ　或抄　明石上の心を我身のうへ
てとしいへり須也
○きとうおさむしくハ　細　紫上の實子まそてもし
まさハしと也
○いてやきと　或抄　思ふまくうとをうきさせ中
たとくい方也
○うしこまハ　万水　大井の宿れ家を源氏見
須ての心也

なふくそどう。くいうらしと見須へバ。
そちうさくへのかぎ海しきもとよ
あくおがしゆかされよさりぶ。かふ思ひ
そとはまんと。書きすそいはず
こひかりぬがきよ面をとぞ。うち
まゆつく。ふきろよい望て。うら
うまぞきる計ちをとらくわ須ひつく。
たりずきめ須へ事はき海見ぐきらろ
おほり。お前ろうそくぐ家がう
おかじく。いぶでやうどうくひあへ
つまうしこまいとのどやうふ心ぞせ
あるそうひよもとを方て。家のあり

○なべてよの常乃　万水　明石上の世の常の人ならも
あハれの類ハあらじと思ふべきを此人ハ又め
づらしき心ばせにて奇特なる人なれバ大かたにハ
思ひなされぬと也

○世をすてぬひかりの　巴抄　明石入道の思ひすて不
ハかりをすて思ひめぐらされもへりゆへ立かへり
給を心ろしきとかや　又の儀入道の給つゝ
なるゝを思召也此義可然也外はなりひかるの
のむすめなれども自分ハ上品なりと也

○ところよ　或抄　ひとを心のとゞめところ
なれども帰給ふハ心ろしき也

き海もやうかはりてめづらしさよ。
こゝのきらひかどハみえぬるまゝび
こゝふやいじゆきさんでゐよとゝる
まぢ乳んとよふかくずからすれハ
わゝまゝかりしうねびまさりゆくぞ
よのなかのおぼしなりくさまざれ
うらべさらたびひるすゝやゝとおとな
づさとせるにぬひがわのうちおや
のけすえなどとそろしきれ人の給
などハさそもあづき給とあすどおど
とへつにあるゝほどよのとわれ
まやこゝろのどゝるずさち御り

○夢のわたりの浮橋　河　世中ハ夢乃わたりのうき橋か
うちわたしつゝものをこそ思へ
細　あとふ夢のやうなる心を思ふ給也明石上を
あかず思ふ給ゆへ也引哥ニ不及にや
○そのあはれそ　万水　彼浦にて明石上に対給し
ことを今思ひ出給ふ心なるべし

○ひとを　或抄　源氏つみなきて給ハぬ也

○引もてきん　花　引もてきん　一本引かんし
きんとおもひとありてハ具也かんしも同説
物のとくのかゝる心也河海にハ菫の字に釈す
不審也　巴抄　青本引もて　もてくるると
いかん用ハ超過しかると云心にや
○こふかる不　細　源氏の上臈しき多也そて
まても聊尓に物なとまへりなるハもれ共也

給ふもうつしくて岩のまとらり乃
うきうるのとまちなかれで
乃ことのおもむき川よせてのおもし
まてさ殿更うりしねも御けしき
しうでうちなれハびわをとりかく
せあ給へバ、ひとつしるべわきかなわせら。
いらしかのこ川ぞうしきんとおぼ
さるゝがきのかとなるごとに海やふ
くうり給てかさずかるゝかけをゝろ
うれど、やうふさゝまあり給ゆり
ゆりあまりバなぞかさこそこゝのとく
いるゝけりハさこしかぞとゝもえて。

○近き御寺　細　御寺へちかくまうでゝ御出ある也
○又いとけざやかに　巴抄　たひ人宿てるかとて出をし給ハとさて又大かたのさまにもなされぬ也
○女もかゝる　手　源氏のをしへてのやうにしたかひ給ハぬを見しりそ也
○すぎたりと　花　すぎたるハ過也身のほどよりすぐれたるふるまひハせぬ也さりとて又卑下せぬハ過不及なき中庸の道理也
○御心おきて　或抄　源氏の御心に不違也
○おぼろけに　万水　源氏の思人あまたおはしませど其所にても明石上の所そのやうにおぼろけにもうちとけ給ふ事ハなきにまさるめでたき所と明石上のきゝてよろこぶ也

ちかき御寺かつらどのなどに
おはしましまぎらはしつゝ。いとまほ
にもみだれ給はねど。又いとけざやか
にはしたなく。おしなべてのさまには
もてなし給はぬなどこそは。いとおぼ
えことには見ゆめれ。女もかゝる御心
のほどを見しりきこえて。すぎたりと
おぼすばかりのことはし出ず。又
いたくひげせずなどして。御こゝろ
をきてにもてたがふことなく。いと
めやすくぞありける。おぼろけに
やむごとなき所にてだにかばかり

○中〳〵いとゞめなれて　細　二条院へうつろひなんするをハ有ましきことにする心也
○ふりはへ給へる　細　ふるきさうなれどまさしとわざと給ふ御心ざしの深切なるをいへり
○たけき心ち　万水　思ふかひあるとの心なるへし
○さこそいひしか　細　此世をハ思ひすてたるやうにいひしを也
○此御心おきて　或抄　源氏の御はからひてなすの事也
○おもだゝしき　巴抄　細々人を上下させてきくと也姫君を紫上へ渡しうとハてハむねつぶるゝ又裳着のさとくしきさまてハ喜悦せり
○其比大きおとゝ　細　葵上の父

もうちとけ給ふことなく。けだかき
御もてなしをきゝおきたれば。ちかき
ほどにまじらひては。なか〳〵いとゞめ
なれて。人あなづらはしきことも
ぞあらまし。たまさかにてかやう
にふりはへ給へるこそ。たけき心ち
すれとおもふべし。あかしにもさこそ
いひしか。この御心をきてありさま
をゆかしがりて。おぼつかなからず人は
かよはしつゝ。むねつぶるゝことも。
又おもだゝしくうれしきことも
おほくなんありける。そのころおほき

○世のおもしと　孟　摂政めかしきこと也
○しばしこもり　細　致仕表奉りし時の事也
○よろづのこと　万水　源氏も此太政大臣に何ごとも世中の事ハまかせ給ていとま有つると也
○ことしげく　万水　今よりハ政いとまなくわづらはしきと也
○御年よりハ　或抄　冷泉院十四歳也

おほくうせ給ひぬ・世のおもしとおはしつる人なれば・おほやけにもおぼしなげく・しばしこもり給へりしほどをだに・あめのしたのさわぎなりしかば・まして　かなしと思ふ人おほかり・源氏のおとゞもいとくちおしく・よろづのことをしゆづりきこえてこそ・いと間もありつるを・こゝろぼそくことしげくもおぼされてなげきおはす・みかどハ御としよりハこよなうおとな〳〵しうねびさせ給ひて・世のまつりごと

○しづかなる御ほい　巴抄　御遁世の有増なるべし
○御子ともゝ　万水　太政大臣の御子孫達よりもこまやかにとぶらひ給源氏の心殊勝也
○物のさとし　万水　禁中にもと色〳〵の怪どもあるよし也　或抄　さとしハ諭也さとしむかふ心也
○例にたがへる　万水　客星などの出る也

もうしろめたくおもひきこえ給ふべきにハあらねども・又とりたてゝ御うしろみし給ふべき人もなきを・たれにゆづりてかハしづかなる御ほいもかなハんとおぼすにいとあかずくちおし・のちの御わざなどにも御子どもむまごにすぎてなんこまやかにとぶらひあつかひ給ひける・その年おほかた世中さはがしくて・おほやけざまにもののさとししげく・のどかならで・あまつそらにも例にたがへる月日

○雲のたゞずまひ 河 應和二年七月晦日黒雲氣一条廣三尺許起坤亘艮 康保二年正月五日白雲廣三尺許經天亘東西

○みち〳〵の 河 諸道の勘文也

○内のおとゞ 或抄ノ源氏ハ天子の尊親にして人臣なるゆゑなるべし

○入道きさいの宮 細 薄雲也

○院にわかれ 或抄 父帝崩御の時冷泉院ハ五歳にておはしゝ也

○今年ハかならず 細 后の御詞也我身も命のかぎりと志りつゝおはしまさんをいふ也 巴抄 為雲卅七歳女のつゝしむべき年也 此物語にハもはら重厄をいへり

○おどろ〳〵しき 万水 おどろ〳〵しくハおもひ給はぬさまなりし也

○功徳のことも 巴抄 くはしくとも名けなきやうにあるべし也 弄 此心づかひ上臈しく感あり

ほしのひかりみえ。雲のたゞずまひ
ありとのみ世の人おどろくこと
おほくて。みち〳〵のかんもんどもゝ
たてまつるなかにも。あやしう世に
なべてならぬことゞもまじれり。
うちのおとゞのみなん御心ひとつの
うちにハわづらはしくおぼししらるゝ
ことありける。入道きさいの宮ハ春
のはじめよりなやみわたらせ給ひて。
三月にハいとおもくならせ給ひぬ
れバ。行幸などあり。院にわかれたて
まつらせ給ひしほどハ。いとけ
なくてものふかくもおぼされざり
しを。いみじうおぼしなげきたる御
けしきなれバ。宮もいとかなしく
おぼさる。今年ハかならずのがる
まじきとしとおもひ給へつれど。
おどろ〳〵しきこゝちにも侍ら
ざりつれバ。いのちのかぎりしりが
ほに侍らんも。人やうたてこと
〳〵しうおもはんとはゞかりてなん。
くどくのことなども。わざとれい
よりもとりわきてしも侍らず
ありける。まゐりてこゝろのどか

○うつしさまなる　河　現様也　現心（万葉）　現人（日本紀）
花　いつも違例ならぬ心也うつし心ともあり
本性の心也

○いとよはげに　弄抄　御門へ被仰詞也

○されどいとわかく　弄抄　御門の御目よりいとわか
く母宮をと見給へり

○をしくかなしと　孟　冷泉院御心也

○つゝしませ　或抄　御門の御詞也一説御心と有
いく

○御つゝしみなと　弄抄　御祈なとをもし給はぬ也
御門の今おどろかせ給へり

に昔の御物がたりもなどおもひ
給へながら。うつしざまなるおりすく
なくて。くちおしういぶせく
て過侍りぬることゝ。いとよはげ
に聞え給ふ。三十七にぞおはしましける。
されどいとわかくさかりにおはします
さまをおしくかなしと見たて
まつらせ給ふ。つゝしませ給ふべき
御としなるにはれ/\しからで月
比過させ給ふことをだになげき渡
りはべりつるに。御つゝしみなどをも常
よりもことにせさせ給はざりける

○いみじう　或抄　御門の御心也此まへの一段を
御門の御心といふ一説此詞よりまされり猶可見

○月ごろは常の　或抄　常く違例なりとおぼし
めせハゆだんし給へる也

○かぎりあれハ　細　かぎりありて還御ある也

○そう/\しうも　万水　天子の還御まても御いと安き
ひまなき心也

○たかきすくせの　細　后の御心乃中也
或抄　国母となり給へる也

○心の中に　万水　源氏と密通し給て此御門をま
うけ給ふ御一期の間の御物思ひと也

こといみじうおぼしめしたり。たゞ
このごろぞおどろきてよろづの
ことせさせ給ふ。月ごろはつねの
御なやみとのみうちたゆみたり
つるを。源氏のおとゞもふかくおぼし
いりたり。かぎりあれバほどなく
かへらせ給ふもかなしきことおほ
かり。宮いとくるしうてはか/\し
うものもきこえさせ給はず。御心
のうちにおぼしつゞくるにたかき
すくせ世のひゞきもならぶ人なく。
こゝろのうちにあかずおもふこと

○上の夢の中なること　已抄　源氏真實の父なることをおもひしらせ申して思召也

○急ぎさせ　或抄　世のなげきを後世のさはりともなるべきと御心よりて云也

○大やけごと　或抄　大臣世間のことをさしはからひ也　まして太政大臣となりたまひ内裏も又その事を委くあつかひたまふべき也

○人しれぬ花　源氏と女院との御中のこと也

もしへにまかりなりなむとおぼし
きこゆるへの夜のうちにもかくる
ものこゝろとさしせさせたまふ
をさすがふかくろづかしたま
らせたまひてこまやかなるところ
めづらしとおぼしあそびてたまふおぼし
そうばこゝろもちしたまひけるおほで
いおほやけごとのまつりごとまでにも
ごちそうへのかぎりよろこびはべりさ
うせたまひにしをこそ人こそおぼし
なげくにけるれおほしなれてゐにさうなう
なくてはゝのりまにおほしよる

○年ころおもひし　或抄　この密されたる也

○さるべき人く　或抄　上臈女房をさす也

○月ころおもはせ　或抄　女房たちの源氏へ語り初也

○かうし　河　聖武天皇神亀二年柑子従唐国來殖種柑子　本草云柑子無毒云々仍病者

ことかはしそのおぼしなりさり
つねさびらしき今はさびしきなどを
なりゆれがたくおぼさるれば
ちりき几帳のうちよりうつらうてた
わりき給はども女房どもまいるよ
とひきて給ていとさうざうしう
さぶらひてこ海のふかさ月は
なまめきたまへるにてうちまれども
なひとときのうちも世をましたまひ
はずせきとたまへるのにへにいぼ
ろうそれらせたまへるよこのびろと
なるてかくしゐふとかどもれなせ

宜食之　細辛子毒なきさゆへに病者も食まゐるといふ但それまでもなくて不食を
いふなるべし

○院の御ゆいごんに　花　是ハ古院の御遺言によりて源氏君の政をし給ふを女院の御心に
目ざましく思し給ふとかのうらみの給也

○何につけても　或抄　とにつけてもの給はんと心のうちそへて思し給ふと

○かのく　或抄　御几帳のもとにより給ひつゝゆく
きこゆる也

○御いへと　花　源氏のあながちにむせび給ひて
御いらへもえ申給はぬと也

給はずありふされば・このごろ
うくなる世ならんとかなしき
なげくべくおぼす・ゐんの御
ゆいごんによるをひそてうちの御心し
うとつかまつり給ふとだに
おもひきこえ侍るとおぼしめせども・を
よつきてかれのこゝろもせこと
あるさまをも・かなしきこんと
の・のどかふおもひ侍るを・宮
るんわすれなうちおしくとかの
うきの給ふするも・かのごときる
ろくは御心へも宇のえやうくおぼせず

○あさくらしを　或抄　源氏の心何とてかやうに
おもひ給ふをと人の不審せんずるを補給也

○大かたの世に　或抄　露このまゝに世をそむき
てもおもむきゆくと也

○心よわきに　万水　さらぬ別ハ心のまゝならぬ也

○えかくしたまね　巴抄　源氏の返答也
孟　種々の心有べきを見るにわざとくはしく書顕しる
所紫式部作意深切也尤面白き

なきさまをさまいてらうじ・など
かくしもこそつらき海よと・
人めをおぼし給ひとゞまり
の御ありさまを・大かたこの世につけ
てもわてしくおしき人の御
わりさ海を・こゝろよみなさ
るゝねばかりとゞめゆきんくなく・
いふかひなく思さるゝことかぎり
なしたかくしりわたかひなくも・・
むつかしう御心そつかまつる
ごさとどこそろのいろうざられ
あとりがおもひ給へるよ・

○世にはんじやうも 一家 源氏もながく絶まじき
こゝろ也

○ともし火きゆるの 河 如烔盡燈滅（法華經）

○かしこき御身の 或抄 国母女院と申すも也

細 是より薄雲の行迹をいへり

おほきさきのくらゐにゐ給ひながら
をだに世中うらめしく
おりふしへらるゝに文くおもひ
まで世ばよろづまこゝろぐ絶て。
世にはんしものゝうるさき心ち
うんじ給ひしやすからぬ御ほどに。とも
し火などのきえいるやうにて
うせ給ひぬれば。いふかひなく
きことをおぼしなげく。かしこき
御身のかくはかなくなり給ふも御
こゝろぐるしき世のさだめとも
あはれにおもはれはべりまして。

○かうけに 河 豪家 有千人卿謂豪又高家

史記註楊冠子曰德万人者謂之後德千人者
謂之豪德百人者謂之英

細 權不肖の差別なき也其身權威をふるひ
給ハぬ殊勝也

○人のつかうまつる 万水 奉公申すなどゝいふも同じ
ひとかたの人をもいとしめ給ふ御心也

或抄 人乃奉公し仕るものゝ事にや

○えうなきに 細 無用の物をハついやし給ハさるに
或抄 人のそしりにもよりて名聞なる事なきと
昔をでられしるすわりし也佛法などのことを
人のすゝめひまなき事ハ給ハぬ人もなき也

○これハさやうなる 或抄 さくしくいひつき
なをもし給ハぬ其御身相應に給ふ也

かうけにことよせて人のうれへと
なることどもおのづからまじ
るを。いさゝかもさやうなることの
みだれなく。人のつかうまつることをも
世のうれひとなるべきことなれば
とゞめさせ給ふ。などのことにても
すゝむるより給て。いかめしう
めづらしう人など。むかしの
さうしき世の中もまかりけるを。
これハさやうなることもかくされど
ようのそこりのえうなきことゝ申べき
つきゞず。ゝのものゝさるべき

○山ふかき　万水　さまくらする山寺法師なと
の心也
○おさめおける　或抄　此葬送也
○なへてひとつ色に花　天下諒闇のとき也
河村上御記云天暦八年正月四日母后崩廿四
日今朝撤尋常御簾雖懸芦簾以鈍色縹
端男額
○花のえんの　或抄　花宴に源氏の春鶯囀と
まひ給しに藤壺もゆかしきものとおほし
出けるにや
○としはかりハ　河　古今　深草の野へ此桜し心
あらハことしはかりハすみそめにさけを
○人のみるめ　或抄　何ゆへにかくまでいとへる人の見
とかめんするを怖れ給也
○山きはの　弄　峯の梢也
巴抄　山の空のきはをいへり
○うす色　万水　薄墨色也
或抄　天の雲までもうす色にて哀とそ
ゆかしきやうに見給也
○入日さしそふ　源氏也
細　源氏も今服衣を着し給ゆへ也
○人きかぬ　細　かやうにおもしろき哥あるれも
人乃きかねはとゝろるれハかひなきと也草子地也
○御わさなとも　孟　四十九日也
○此入道の宮は　万水　薄雲の御母后の事也先
帝の后也桐壺巻に母后もうせ給てとあり

ぎりてまことにこゝろぶかき
ことゞものかぎりをしおかせ給
へばなにとわくまじき山ぶしなど
までおしみきこゆ。おさめたてまつるにも
世中ひゞきてかなしとおもはぬ
人なし。殿上人などなべてひとつ
いろにくろみわたりて。ものゝはへ
なき春のくれなり。二条院の御
前のさくらを御らんじても。花の
えんのをりなどおぼしいづ。とし
ばかりはと独ごち給て人の見とがめ
つべければ。ねんずだうにこもり
ゐ給て。日ひとひなきくらし給ふ。
夕日はなやかにさして。山ぎはの
木末あらはなるに。雲のうすく
わたれるが。にびいろなるを。なに
ごとも御めとまらぬころなれど。
いとものあはれにおぼさる

入日さすみねにたなびく薄
雲はものおもふ袖にいろやまがへる。
人きかぬところなればかひなし。
御わざなどもすぎて。ことゞも
しづまりて。みかどものこゝろぼそ
くおぼしたり。此（古イ）入道の宮の御はゝ

○こまやかなと　万水　僧都誰ともなし
古宮ハ女院を云也

○おもき御おぼえ　或抄大やけにもおもく（紹）
とうや　巴抄　御おぼえにて白いかめしき御願
ともおぼえつゝ白こゝも白をきゝされハ
はしきかあつ
○御ぐわんども　或抄　僧都の誓願なりや

○宮の御事　細　うす雲の事也

○もとのごとく　或抄　まへ／＼のごとく護持僧に
さぶらはれよと源氏もすゝめ給也

きさきの御世よりつたはりて御いのりの師にてさぶらひける僧都．故宮にもいとやむごとなくしたしきものにおぼしたりしを．おほやけにもおもき御おぼえにて．いかめしき御ぐわんどもおほくたてゝ．世にかしこきひじりなりける．年七十ばかりにて．今ハ終のおこなひをせんとてこもりたるが．宮の御ことによりて出でたるを．うちよりめしありてつねにさぶらはせ給．このごろハなほもとのごとく参りさぶらはるべきよし．おとゞもすゝめのたまへバ．今ハよゐなどいとたへがたうおぼえ侍れど．おほせごとのかしこきにより．ふるき心ざしをそへてとてさぶらふに．しづかなるあかつきに．人もちかくさぶらはず．あるはまかでなどしぬる程に．こだいにうちしはぶきつゝ．世のことゞもそうし給ついでに．いとそうしがたく．かへりてハ罪にもやまかりあたらんと思ひ給へるかたおほかれど．しろしめさぬ

○今ハよゐなど　或抄　僧都詞也年よりたる由也
花　夜居の僧ハ二間に候なる也

○古き心ざしを　万水　古宮よりの心をいへり

○人もちかくハ　或抄　御前人もなかりける也

○こだいに　万水　古めかしき也

○いとそうしがたく　細　僧都の詞

○天のまなこ 花 天眼 五眼の一也帝釈梵王等の照覧也
○なにのやく 河 何益
○佛も 孟 是を不申ハ佛もなくしと思んと也
○うへ何事あらん 或按 此門此心也
○法師ハひじりて 弄 一勘何事とハ定るし寛算供奉なとさいの事也なくふるなれをめしとおほしめすかや又大かたそもさを有事也 万水 ひじりとハ法師の中に貴をいふ其中にもとまんく愚癡なるも有物也
○いてをなりし 細 主上の御詞也さてよ却状におりまさ時より心へてもおかしめされしに今ハ隔心なきよしなるを待るよと

つまかハて天のまなこおそろし
くもかおへらすことどろんに
むせびなくいのちよりゆるれ。
るにのやくハゆるんほけもん
ぼさつしとやおかしかきんとかり
かなしきてえらいでのと也。
うるにしるんかのせよろくお
るべくおりふしやあんほうしを
ひじりもしいふどもおうすぎき
さ海のうきつくそくそあるる
ののきとおかりてぞなけるかし
ときまりつぞく哉みなおなぎと

○あかりこ 細 僧都の詞
○さんこんの河 秘密真言の事也
○まして心に 万水 いさくりを心におろくまなこと也
○大事を待る 万水 是ハ聊会にハやましき一大事と也
○あおりまし院 細 桐壷也
○后の見や 細 薄雲也
○世とまつりこち給ひし 細 源氏也
○よくみすまや 也按 此門のはなれいく也

かこ…ひのこされへか
こしるけかきかん。つくくおもひ
めくくの給はされば。おまりしこ
さうふかきけのいさあまりお給ふ。
さんごんのうへさらとずなし
とぶひのそうすひろめ給ふ
まうつまして心にふかく海る
ころにしまう給ん。大事を待る
うきゆくさきのはかりと給ふと
みとうだおりまし院のん后の
みや。いま世とまつりこち給ふ
ゆくのはなれずそくみて給ふ

○くろ老法師の　或説　此事を申出して我身ハたとひきらるゝとも何の後悔もなし也

○佛天の法を　弄まさく嘆しき也

○わか君　細　我君也主上をさして申さるゝ

○こかや　細　薄雲也

○よこき衆の法とゝ　或説　ま衆のうろひ也

○いよくおち　或説　悪后のとしまでつきをなしてくとおちなしす

ことまやりつゝて御らんかくるおひ
ばゝしの身にハたとひうき二つり
ともなのく弁を御らん給ふ気色
わかよりてちらし御らうしうらか
こみちくまれおりましらし
さきより故家のちくおかしけ
くしわりて出のり給ひまつ
らせ給ひへるん給しくく法師
のこころえさせ給ずとの
たびひあわてお下とこ海の
つまわきりなひしきいよく
おちぬかりてかまりて御所の

○是さらよろすくとゝ　世説　源氏よりハ祈禱のすおわせらきて也御位につき　或説　密事被法よりハ御即位あるやうもしのきうる也

○そのさもとゑかりし　花　當代の帝ハまゝくハ源氏乃御子まてましまさ也

○わさましう　或説　御門の御心也

○ところり　万水　あけし八御のへとしなハをわされ給哀也

○とも見るし　或説　後部の心也御きをんわしさりとも也

どもうけ給りかしどおもにも
きこしめてらん文ことくさく
（御位まで出てあまつきおり
ましまそつくまうらともか
しかのうけ給りし海とそ。
らしくうふするとことしめそ
よおさましうめづらるそおきろ
しくとおすらもさ南くと御
こころされなごくり出のく
もうけまハ僧都とといそし
ほるとびんらすやかりわすみ
まづりゝおりかてやとくし

心にありて　細　勅定也よく〳〵聞と也

○又此事と　万水　別に知人もあるまじと也

○さらばなるかりしと　東拙　得都詞也我と主
余婦と両人の外あるへからさそかたろ
しさと也

○天へんなと　河　天變
細　例に違る轉変のなまへに見えしろ

○ひとさかて　孟　幼稚よりおそろしきことをかしく八歳
ゆるし侍りと也

○よろ侍のなり　万水　おやと云り給ひてハと也
巴拙　おやのむつひのわかてきさとのと也

○思ひへ世ち　巴拙　老僧の心より外あり
しさしとおもひしと也

まいてまづおとめしとめて
こゝろにありて聞ゆる内侍べ
は此世までのとが絶わるべかり
ことゝい内でゝ世のびとめて也
うかゝとるんなりてうしろ
めくらきとつるりとひあち。
又世のことなさりてわらしはふ
るたびひやわかんとの外子定
よるばしと主命ぬしてわれ
の人のあとの後とさらん命
とさうふりあんいとおりあり
に。天魚乙あゞまさうふさし
世中しづかなるぬいおのれるらひと
きるかりのこゝろしろしめと
まじらうかどもそ侍り侍也。
やうく出ようひとるおもしまて。
るにとも玉えまへさ世ほへさけ
よいふて。らぐとも世をとなり。
ようつくしおやの御世まうて
まうまそ侍るれ。るにのつくも
とうめきめぐおぼえてふぶらう。
老法へもちてしこととふまう
よろいぶ侍らでしきてあらく宇
ゆるやかよわけそての道ぐきぞ

○夢のやうに　或抄　御門の御心也

○おとゝのく　万水　源氏ハ御おやすくる臣下の位と也

○おとゝも　万水　御門御おやすやのやうにけなして源氏を内也

○御なすこの　或抄　源氏を寳物に御おやとおぼしめして世ろしさに御落渡あると源氏ハ母后の御かたみへと思給也

ねうくは夢のやうにいとゞきそ半をきこしめしていとゞくにおぼしこぶれは世の人悲しみの御たちあもしわらくおとゞのくにぐんまで世の人にもおゆれはかゞしけるうわらしらしておぼしるやそひるなるそでいそまけ給ふ御かぐれんとせ給ひておとどもおどろきまいる給ひぬる御んげすゑつぎても心ぐ世びぐくおぼしめされて御おそくのこゝろせ給ふとおぼしき古

○式部卿の乃こ　弄　桃園宮の事也　巴抄　源氏のおぢ槿斎院の父宮也

○おとゝハ里ゟも　万水　源氏二条院へも退出なき也

○世ハつきぬるにや　細　勅定也

文の中ことさひつくふしおぼしめしらるれバ猶ひとりとゑんましまさふみの日まうで乃見せ給ひあそびらるゝはいるよく世間のさかしさととろげきおぼしめしけるるれどおぼくいさゝかも見まそてゐらぞ。源ときふひるるぶしめやかな御ねぶくりの給ひぐに世ハつきぬるにやわらんかのこゝろぐるくまいらるねこちらんするとおめのしたもくのぶるかる、第り

○こ宮のおほん　細　こ宮とハ薄雲女院とさしのたまふとの給也
○ひとわろまじき　細　源氏の詞也
○まつりごとの　或抄　天下の怪異ハ必政の善悪によりてもあるべし聖賢の代にも自然と有ること也御門をさとすことなりと仰給也
○ひじりの　河　後漢皇后紀上　堯湯負洪水大旱之責高宗成王有雊雉迅風之変雖有小異不失天徳　本朝延喜聖代菅家左遷事以下欤和漢先蹤不可勝計

わづらしくなん。故宮のおほんこゝろよせて、世の中のこともおもひわづらひつゝ。いかゞハ心やすきさなるとても、すゞろに御かなしくらんとく/\ひそみ給ひ。いとあはれにきこえ給へり。世のしづかならぬことは、かならずまつりごとのなほくゆがめるにもより侍らず。さかしき世にしもなんよからぬことども侍る。ひじりのみかどの世にもよこさまのみだれいでくることありて、もろこしにも侍りき。わがくにもさなん侍る。ましてこのころのうれひどものそれ/\のことをおぼしなげくべきことにも侍らず。などゝく/\おほくのことゞもをきこえ給ふ。まひゞもいとくらいろや。常よりもくろき御よそひやつし給へるかたち、ちがふところなし。うへも、としごろ御かゞみにもおぼしよることなれど、きこしめしてのちは、又こまかに見たてまつり給ひつゝ、ことにいとあはれなれば、おぼしめさるれば、いかでこのことを

○ましてこのころの　細　致仕大臣式部卿宮の薨のこと也いつれも皆かぎりある老人ども也
○ちかふところなし　細　かやうの事ハ女なとのまねぶべきにあらねどもと也草子地也
○常よりもくろき　細　今主上も源氏も同し御服にてましませハ猶まかふかたちと也
○うへも年比　河　御門も年比ハ源氏と天子ハ御連枝なれハ似給よしと遠くおぼしめしける也
○又こまかに　或抄　源氏をこまかに見給ひいとよく似給へれハ親子の宿縁を思召也

○さしあたりても　或抄　さしあてゝハ源氏之めいぼくなるべしとの意也
○年ころこまり　細　平生なると似といへり　きこしめしハ源氏よりむかひおそろしきをあやしく思給也
○うしろきん乃　巴抄　源氏やそてけんしまうころなるへし
○いとくるしく　或抄　僧都の奏せられしるまハ志り給ぬ也

うときこえまほしくおぼせど、
さすがふりはへてもおぼしめぐ
らさるれバ、らうさけかへちるよ
つねよりもえちかゆえ
給ふのかたにはおぼしめすと
じゆと、つわてふかうけ
きこしめせ給へらくこともり
給ひて御そはにちかくさまと
ゐてとふらひしかのはかなきあや
しみそてまつりたまでいとく
きこしめしきこえんとは
おぼしめすらし（只今会ぬり）

○今さらに　細　薄雲をはなくおもひなれひしみなるを今さらにさらにしひなきるといふとおぼしめす人と也
○その人なりと　或抄　命婦也
○さてさてかゝる事あれ　或抄　天子の尊親乃まぎれてあるす例ありやとひさしくおぼしめせしとついてなかりしと也
○いよいよくわくもん　細　博学なるにてハあるさきるしと也
○さまざまの文　或抄　書籍也
○もろこしにハ　河　秦始皇ハ荘襄王の子として位に即といへとも實ハ始皇の母太后嫪毒呂不韋と云臣下に密通して所生云（見史記傳）
細　秦始皇のミ河海にみえてかくれしもおほかりしと外にも例有へし私是を案するに晋元帝ハ牛金といへる人の子也去程に秦始皇

そそしさせしこそ源氏にかゝり
めせど。今さらふかくおぼしかへらん
きんこともしりたるこの人も
おほそれげに、さてはよにいそがの
めしとひはえて、さまざまのう
その例はありやとひきみんと
でおぼせど、さるふみは、なでてもる
されバ、いよいよかくもんの文をみさ
給て、さまざまのふみどもとけん
するに、もろこしにはあらはれて
も忍びてもみだりがはしきこと
いとおほかり。日本にはさらにふ

と呂不韋か子なりけるによりて呂秦といひ晋元
帝ハ牛金か子なりけるによりて牛晋といへり
○日のもとにハ花陽成院の御母二条后也業平
中将の后に近付まいりたる伊勢物語に見えたり
陽成院帝ハ中将の子と云事あり其も疑に志し
傅ふる文なとハなき也薄雲女院の御事も是了
准て可思　細　我国にもさる事あるへし花鳥陽
成院の御事をひきたり是難用私此事ハ誠以
子細ある也
○一世の源氏　河　光仁天皇元大納言　桓武天皇
光孝天皇　宇多天皇　河委略書之
○さもやゆつり　或抄　源氏に位をゆつり給ハんと也
○太政大臣に　細　こゝにてハいまた任せす相国
に任せらるゝハ乙女巻に見えたり

けんじうらゝろうしたまひ
あるまでも。やうにさうのびさん
ことゞもいでゝうつくしきやうの
あらんとする。一世の源氏又納言大
臣になりてのちにさらにみこにも
なり。くらゐにもつき給ひつるも
あまたの例ありけり。人がらの
かしこきにことよせてさりや
ゆづりやしまゐらせんとよろづに
ぞおぼしける。秋のつかさめしに
太政大臣になるべくさだめて、
うち〳〵にきこえ給ふついでに

○おぼしよりける　細　位につき給はんとの事也
○いとまえゆる　孟　可有譲位との義也
○故院の　或抄　源氏詞也　桐壺帝の御をさして
のたまふ也
○何かその御心　或抄　桐壺帝の御心といふへて
ハ何とて帝位にのかりやさんとの事也
○そむきの　或抄　桐壺帝ハ仕置のごとく
臣下にそおき給ひしと也

なんぞどおぼしよするとそら
のことわりしやうゑなきと右
いとまゞ申くおそろしうおぼし
てさらにあるまじきよしを申
しく。故院の御こゝろざし數
多のみこたちの中にとりわき
ておぼしめしながら。くらゐをゆづ
せ給んことをおぼしめしよらず
まろくるはかの御こゝろをそむき
ておよばぬきはにのぼり侍らん。
たゞありしの御おきてのまゝにおほ
やけにつかうまつりて、いま少し

○のどかなる　或抄　遁世閑居のおねがひ有也
常しかやうに物語ありしなるべし
○じし　細　源氏の斟酌し給也
巴抄　御門乃御思案也
○御位そひて　弄　従一位の事也
○牛の車　河　寛弘八年左大臣藤原朝臣
乗牛車出待賢門上東門等云〻
巴抄　牛車の評諚ありし乗牛車禁中に入
事まれなるゆゑにや
○あかずおぼす　万乗御門ハいづれも不足にあらし
めでたしと也
○なをみこに　或抄　親王に成給へと勅定也
○世中のまつりごと　細　天下摂政也
或抄　源氏の心也

のよはひきはまりゆかば。のどかなるところにこもりゐなんしおもひ給ふとて。この御ことのをよろこびどもうしまうへば。いとうらおぼしけるん。おぼし出辞太政になり給ふべきさだめあれど。じしとおぼしとゞまりて。くらゐそひて牛車ゆるされてまゐりまかでし給ふを御門あかずかたじけなきものにおぼしめし給て。みこになるべき宣らしとおぼしの給へれど。世中の

○権中納言　細　葵上の兄也
○今一きざみ　或抄　大臣にと成給てハと也
○何事をゆづり　細　源氏乃心にまかす也
○しづかなる　或抄　閑居のこと也
○御くしげどの　弄　王命婦也
巴抄　可然女の官也天子の御衣なとを調所也

御うしろみし給ふべき人なし。権中納言大納言になりて右大将かけ給へるを。今ひときざみあがりなば。なにごともゆづりてん。そのゝちにともかくもしづかなるさまにとぞおぼしけるを。おぼしめぐらし給ふ。古宮の御ためにもいとおしく。又上のかくおぼしなやむを見たてまつり給もかたじけなければ。いるかことゞもしろしめさんとおぼしうおぼさる。命婦ハみくしげのうつりたるつぼねにまうでし

奏すとこし　細　源氏のとひ給也
○あないし給　或抄　案内也内意をとふ心也
○きこしめさむことを　命婦返答也
細　薄雲の御心におろかならず思ひ給へる也
きこしめさんとハ主上にきこしめされんをおそるゝ也
○さるハつみうる　或抄　主上にきこしめさせて
主上の御ためをとかくつみをえんずる
と思ひ給しと也
○ひとかたならず　細　薄雲の御心ふかくおはし
ましゝを一方ならず源氏こひしく思給也
○斎宮の女御ハ　細　秋好中宮也是より中宮
の御事をいへり源氏のうしろみ給ふ也
或抄　斎宮をとりもちまゐらせハ御門の御後
見によからんと思食たるに案のごとくと云

給りてまゐりたり・おとゞ対面
し給てこのことをもしものゝつゐで
に・露ばかりにてももらし
そうし給ふことやありしとあないし給へど・
さらにかけてもきこしめさんことを
いみじき事におぼしめして・さるハ
つみうることにやと上の御ためを
なほおぼしめしなげきたりしと
きこゆるにもひとかたならず心ふかく
おはせし御ありさまなどつきせず
こひきこえ給ふ・斎宮の女御ハおぼしゝ
しるき御うしろみにて

○もてかしづき　細　中宮の可然人にてましま
せハ源氏をよろこび思給也
○秋の比二条院に　細　今ハ源氏を御里坊にし
給也むかしハ朱雀院へのけさうとおぼして余
所へハやり給ハざりしと也
○おまへのせんさい　孟抄　源氏の御方の前栽かや
○いにしへの　万水　御息所などの事を思給也

やむごとなき御おぼえなり・
御ようい・ありさまなどもおもふ
さまにあらまほしう見え給へれバ
かたじけなきものにもてかしづき
きこえ給へり・秋の比二条院
にまかで給へり・しんでんの御しつら
ひいとゞかゞやくばかりし給て・
今ハむげの親ざまにもてなして
あつかひきこえ給ふ・秋の雨いとしづ
かにふりて・御せんさいのいろ〳〵
みだれたる露のしげさに・いにしへ
の事どもかきつゞけおぼしいで

○御神々も　細　源氏也
○すみ色の　巴撒　女院又式部卿宮の御ため
に源氏のめし給へり
○世中乃さかしさ　巴撒　女院の御ゆかりを式
部卿宮によそへて也
○まて引くし　巴撒　昔ハ俗人ハくせり
○おくつ　万水　出と直に扣ての御物語也
○せんさいともそ　細　源氏の詞也
河古今百草の花のひもとく秋の野に思ひ
たはれん人なとかめそ
○時ならぬ　細　諒闇の中なるを花ハ
色もさかりや也

て御神もぬきつて女郎の御ゆくゑよ
まつり給ひつ。海やまるすひ及
の御なるとしもぞくて。世中乃
さがしきことつきを給ひて。
ゆへて御さうぶんあれバ。すべかし
て御海ゆくもそて給へる所。
せざとる御めしきれあり海にて。
みすのうちより給ひぬ御几帳
ばかりをへだてゝきこえ給。
前栽どもそそのかうふくひも
ときはふきれいとものもさまじ
きそしるるぞうちて時しも

○むかしの御事　細　御息所のこと也
○立まちひしぬれの哀撒　榊巻に野宮にて
御息所対面有まして祈りそ立まちひ給ひ
又明ぐれの別を給ひて大かたの秋の空にふかき
よろしう名残をかし給ひける御こと也
○宮もくれハとまりや　河　いまハへれむかしのことを
いとしくくるしきハ神そ思ふききかる　前坊
○見えなくなりて　細　中宮をハ源氏ハいまささき
に見えなりしにハさろ也　昔ハ男女の身にて
あるなるすなる見えぬとかり
○かうりそ　細　源氏のむろしくれなるを
かうり出し給也

がらるもおもれはこそとげ
らはようぬ給へるタぎくいとめで
たし。むかしの御こともうの野にな
よこまづくひしゆかのことどもを
きこしそすみ。いとゆおかれ
おぼしうら。やもうらいざとゆ。
をとうるさきのゆるきをひいはし
こぼそ。ちらんぞさう給の宿
もおさまりくやいうふる御身さ
ておちすべきんなるぞもそまつるへ
よそらちおりまれともひよおるる
ろぞうそてをかゆ。とぞ深くかく

万水　故院御在世の時より何ゝても御はゞかりなくたゞ
ねるもちかくちかやめり心をあかりしと此好色の
ちきりそ心々のおもひをねと也

○さうざうしき　巴抄　あながちにうらみられおとあり
あしき中なりと也

○いとほし　細　御息所也
○あさましく　細　御息所ハつねに源氏を
うらみてつらひしかすも

○うしろを　巴抄　御息所の御遺言に斎宮
のことを如此とりまかなひて草のかげにても御覧

ことに思ひるやむつかしきことおほく
て侍りめぐらし世中にもなを
らうらうすきずくしたまへとふつけ
て御おもひのことども侍りしか
さるまじきことゞものこゝろづくし
きずおほく侍しなるふつゝかなん
もとけどもとがきてやすかる
ことかはるん侍るまづひと川ハ
このすぎ給ひの御ことにあさまし
そのことおもひつめくやみ給ひしかば
この世のうらみつきておもひたまへ
らましてどうくまでもつかうまつり

着あんと思ふにかくさむと也

○ともえをりの　河　むもあはれきかし烟
をといひし君ふこめよきゝ契りを
万水　御息所の思ひのきたつりみむまれ至て
おそりはしめ来世までの業障ともなんり
いつせつさと也

○今ひとつハ　河　薄雲女院の事也

○中ろちすさに　細　左近の事也

○さくに思ひ　或抄　花散里なとのことも

○東の院に　細　花散里也

○おいらか　或抄　穏也
巴抄　心やすくあなづりし心也

○心さくろ　或抄　花散里の心安のことをさまを
かうゝ也

○我も人も　巴抄　自地心安也

御けんぜうてたうんがくさ御ん
おもひ給へるせど。あのよながら
のちをかきなほさんぞといふ
思ひ給へつるむかしも今
ひかれのおもひきつくすまじき
のなきまゝにしづゝ侍しかどよく〳〵
におもひ給へしこと。さうづるひ
まうびんげのあんにおもとる
人のぞこそえもとるてところ
あるおぼくまゝ侍りしもなぞ
しうひ（かとイ）はすまで侍るなるべく
のよくらぬなどされも人もなん

○かやうなるまきらはしき　万水　好色の心ハやみなんかしと也

○おもひ出ひろ　巴抄　如此後見をもと大きなることゝ思ひをおのめし給へり

○さりやおもふ　巴抄　此同心なるさまとそひまさるとし給へり

○今ハいふそ　或抄　源氏の詞也　在世の間はねかひのまゝと給へも成就して今そ閑居をとゝ

給へおさめて　いとゞれそさちや
るれ。くらゐたかくおほやけの
けしきをうけたまはるにおよび
なじはざしもこゝろよからず御
ど。やうやうすぎ御しきさは
しづかなのこゝろを。おぼしめも
よおもひ出びろげらるゝとも
おりちかく世給へんやおほれと
じのこ御ハせどいづれにひなく
ゆるんとの給ひつゝそれにて
もるけしきはやわかこゝろえ
ことまふいひまほしう給ふ今。

此世乃出生よ　或抄　遁世の後出ひ出なせんするとし也此子のもくろみなるさすも但末の詞よ六条院作給へき造意を兼いひ侍るを

○すゑの君たちおもふさまに　細　明石姫君也後よハ入内あるへし其間待遠なるへきと也

○ゑうと此門　弄于公高門　見河海　心ハ秋好の事まて源氏の一門を繁昌さん時と也

細　皇子誕生あらんことを含めり

花生ハ明石の姫公の后よ立へきことをおほしよりしこと也中宮なとの行啓よハ鳳輦をもし、糸毛の車なとよめさるゝなれハ駟馬高蓋よるさもへぬる也

○れいへハ造　秋好の御返答也

いそのやうにはまゐののちなり
らふとのことず。のちに世の中の
もろこしよせてこりふるん
とおもひ侍るをその世のおすひ
出よしつぎかうの侍るめるれ。さき
がよろちおしう侍めべきれ。ず
るゝぬあざるきさんの侍る御ひまき
いとまちどをなりや。さずげなく
ともるをこのことひろぎもなかれぞ。
侍ずるうんのちうもあすまへ
さぜなへるとはしな。ふはりて入る
いとおほなかるさ御ようらして

○きゝつきて　巴抄　きゝ入て也

○こちくしき　或抄　源氏の詞也
巴抄　きこえさくるをハをさへて也

○年のうち　細　六条院つくらるへき心のあらまし也

○あらハなるさため　細　古来未定のよし也

○もろこしにハ　河　晋石季倫居金谷春花満林
作五十里錦障　遇春不遊樂恐是無心人（白氏文集）

ひとゝばかりみす絶えぬゆきまへらひ
いとあるまじきことゞもなれど
あながちにかうまでおもひはか
ばかしきかたののぞみハさる物
にてとしのうちゆきかはるはすく
のもみぢそらのけしきに
つけてもこゝろのゆくこともし
侍りにしがな春の花のはやし
秋の野のさかりをとりどりに人
あらそひ侍りけるそのころの（げに）
と心よるばかりあらはなるさだめ
こそ侍らざなれもろこしには

萬葉第十一　天皇詔内大臣藤原朝臣競憐春
山万花之艶秋山千葉之秋時額田王以哥判之
哥略之

○やまとことのはハ　花　拾遺　春はたゞ花のひとへ
に咲ばかりものゝ哀ハ秋ぞまされる

○いつれも時々に　河　自古逢秋悲寂寞我言
秋日勝春朝（秋詞劉禹錫）
大かたハ秋に心をよせしかど花みる時ハいつれともなし
春秋に思乱てわきかねつ時につけつゝうつる心ハ

○花鳥の色をも音をも　巴抄　花鳥の色をも音をもさ
侍るにおもひうつる方ハまさるともなきなり

○いづかたに御心よせ　細　六条院四季にまかせて可
造也其中にそ何方にも心よせ給へきと思召と

の花のにしきにしくものなし
といひはべりやまとことのはに
秋のあはれをとりたてゝおもへる
いづれも時々につけて見給ふ
にめうつりてえこそ花とりの
いろをもねをもわきまへ侍らね
せばきかきねのうちなりとも
そのをりの心見しるばかり
春の花の木をもうへわたし秋
の草をもほりうつしていたづらなる
野べのむしをもすませて人に
御らんぜさせんと思給ふるをいづ

ゑんなる也
○いときこえにくゝ 細 大かたなるの返答とおもひ立
○ましていかゞ 細 我身えうるまき心なきには分別有ましき也
○あやしと 河 古今 いつとてもこひしからすハあらねとも秋の夕ハあやしかりけり
○きえうせにし 花 六条御息所かくれ給へる事を秋なれハかくの給へり
細 大事の返答をとくいひおほせるも殊勝也
或抄 是より秋好と申す也
○のたまひけつ 或抄 ことの末をいひもはてず消たる也
○君もさハ哥 源氏也 也抄 さはハ也 源氏と秋とをり分おもはめとももえなり

にかこころよせ給べからんときこえ給ふにいときこえにくゝおぼせどむげにたえて御いらへきこえ給はざらんもうたてあればましていかゞおもひわき侍らんげにいつとなき中にあやしときゝしゆふべこそはかなくきえうせし露のよすがにも思ひ給へらるべけれとしどけなげにの給ひけつもいとらうたげなるにえしのび給で

きみもさハあはれをかはせ人しれずわが身にしむる秋のゆふ風

○忍ひかたき 花 秋の夕ハ忍ひかたきおり〳〵あるとハ中宮にあまりむつまじきさまをほのめかし給よりて心えすとおぼして御いらへもなき也
○このついでに 細 草子地也
○いとうたてと 或抄 秋宮のうるさくおぼす也
○なまめき 或抄 源氏の姿也
○心つきなうそ 或抄 秋宮の心也

忍びがたきおり〳〵も侍かしときこえ給にいづこの御いらへかハあらん こゝろえずとおぼしたる御けしきなりこのついでにえこめ給で うらみ申給事ともあるべし今すこしひがこともし給つべけれどいとうたてとおぼいたるもことはりにわが御心もわか〳〵しくけしからずとおぼしかへしてうちなげき給さまのものふかうなまめかしきもこゝろづきなうぞおぼし

○やをら 花抄 やう〳〵也
或抄 一本やをらとなく
○あさましうも 細 源氏の詞也
○まことに心ふかき 花 源氏君の我心浅さを自称し給也 也抄 源氏の心あさくいひ出し給ふも真実好色の人はかくはあるまじきとや
○つらからんとて 河 つらからん乃あまりに侍くしてつらきはつらき物と思ふせん
○わたり給ひぬ 細 秋好も内へ引入給ふとて源氏も退出し給也
○御匂ひ乃 万水 源氏ひきつくろひし心にて給へは其うつりかさへうとましきや
○いひしらぬ 孟 言語道断なると云也
○柳が枝に 河 後拾遺 梅が香を桜の花に匂はせて柳が枝にさかせてしがな 花 源氏君の万事よりすぐれたる所をおりまされをほめていへり

なりぬる。やう〳〵ひき入給ぬるけしきなれば、あさましうも、うとませ給ひぬるかな。まことに心ふかき人は、かくこそあらざなれ。よし、今よりにくませ給ふなよ。つらからんとて、わたり給ひぬ。うちしめりたる御にほひのとまりたるさへうとましくおぼさる。人〴〵御かうしなどまゐりて、この御しとねのうつりが、いひしらぬものかな。いかでかくとりあつめ、柳が枝にさかせたる御ありさまならん。ゆゝしときこえあへり。

○いたうながめて 或抄 斎宮の事に源氏の物おもはしき方也
○かうあながちなる 細 源氏の心ぐせなりといへり
○是ハいとにげなき 花 秋好中宮の事をさしていへり されど前のハ有まじきことゝにげなきと云り 弄 源氏の心に秋好を思ふかと薄雲にかかり給ふを思ふ人は薄雲のうちなれば を罪ふかきわざ也 されどそのいにしへハとし若きかなそ思ひやりのさきにゆるさるゝを有てしと思ふ給也

給ひて、とみにも入給はず。いたうながめて、はしちかうふし給へり。とうろうをとほくかけて、ちかく人〴〵さぶらはせ給ひて、物がたりなどせさせ給ふ。かうあながちなることに胸ふたがるくせの、なほありけるよと、わが身ながらおぼしゝらる。これはいとにげなきことなり。おそろしうつみふかきかたはおほうまさりけめど、いにしへのすきは、思ひやりすくなきほどのあやまちに、仏神もゆるし給ひけんとおぼし

○あるを時道ハ弄　源氏の弄ぶをめづる心ハ好色の道ならずときこえやうにハあらずのと多思唯を源氏の心好ミてしろしめすと也
○女御ハ　秋好の心也　巴抄　秋の哀をしりがほによおぼせまほしとゆかしく思召てなやましくさへしと也
○いとゞくらしに　巴抄　源氏秋好をいよ〳〵面むつまき後見給へり
○女君に　万水　紫上に秋好のことをかたり給也
○君の春の曙に　弄　紫上の春をあはれとおぼすゆへ此詞ありとなり

さまけもなどこのころハらうろやむごとうさくらのまさりけるふかくおぼしまして世給ひ露を秋のあはれしりがほなるよしへやすしからもやしらずしとけころひと月よりのせつらなまやましげなさへしたまふとてすゞろふつまなくてつひとりもおやがりわりさだ女御ざまみよ女御の秋にこゝろをよせ給へりしもあはれにきみの春の曙のよこゝろしめ給へるもことわりなれ

○御心とまるハかり　或抄　秋好紫上をさしての給へり
○あそびなどしてしかなと　或抄　おぼしたつること也給人とゝもと云心をうちまかする詞也
○ふさはしからね　不祥（日本紀）
巴抄　世の政事ハふさはしからねと也　山居の事をとありたきれとも紫上のさびしきことをおもひてとかや如此おもふハ六条院のかまへ也　或抄　此世の栄耀をつくしてさて山居をせんとおぼしめす也
○山里の人をも　細　明石上也
孟　是よりハ大井のこと也
○世中をあぢきなく　細　明石上の事也

とき〴〵につけたるきくさの花によせても御こゝろとまるばかりのあそびなどしてしかなとおほやけわたくしのいとなみしげき身こそふさはしからねいかで思ふ事してしがなとたゞ御ためさうざうしくやとおもふこそこゝろぐるしけれなどかたらひきこえ給ふ山里の人もいかになどたえずおぼしやれど所せさのみまさる御身にてわたりたまふこといとかたし世中をあぢきなくうしとおもひ

○おほけなし　細　明石上乃京へ渡り給ハん
ずるをきらひしハおほけなきさまと源氏
の思ひ給也

○例のふだんの念仏　或抄　松風巻にあり　毎月
十四日五日晦日と也

○住なるゝ　細　大井里也

○いとふかゝらざらん　細　なをざりの人を置てだ
心とまるべき哀なるべきハ所乃義也
或抄　明石上の心を地よりいへり大かたの人乃
あはれなりともと也

○さすがにあさからぬ　細　姫君の出き給といへり

しるけしきなどかさしもおもふべ
きこゝろやすくたちいでておほ
ぞうのすまひはせじとおもへる
をおほけなしとはおぼすものから
いとおしくて例のふだんの御念
仏にことつけてわたり給へり住
みなるゝまゝにいとこゝろすごげなる
ところのさまにいとふかゝらざらん
ことにてだにあはれそひぬべしまして
見たてまつるにつけてもつらか
りける御契りのさすがに浅からぬを
おもふになかなかにてなぐさめがた

○こしらへかね給　細　なぐさめかね給也

○かゞり火どもの　細　八月の末なれハ自然鵜舟
のかゞり火なとも有べし

○うき舟住居に　細　明石上そのうきを云也浦にていさり
火なとを見なれし人なれハかゝるにもおもへる事を
明石上ハ目に近く明石にて見しゆへにめつらしう
ことに思ひましきと也
或抄　源氏ハ都にてこそ見なれ給ふ也花鳥の
説同之

○いさりせし哥　明石上也　細　此哥古来秘義の哥
也明石にその物思ふを大井にその心にても同じ
になくて舟に身をあまのいさりに思ひよせて
うきするのくるしき心をいへり第四句殊に感有

○思ひこそまよへ　細　まよふ明石にてのいさり
火に似たりと也

○あさからぬ哥　花　かゝりて火のかげとおなじ君の
侘しきハあらはれて下よりゆかしきをのべたり　今案下の
思ひハあらはれて下にこそゆるとおもふきそのさけてとハ
火のかげハさはげど心あるべし下の思ひよるべ

けしきなればこしらへかね給ふいと
木しげき中よりかゞり火ども
のかげのやり水のほたるに見えまがふ
もおかしかゝるすまひにしほじまぬ
心ちにはめづらかにおぼえ
ましとの給ふに

いさりせしかげわすられぬかゞり
火ハ身のうきふねやしたひきに
けん思ひこそまがへられ侍れ
と聞ゆれば

あさからぬ下の思ひをしらね
ばやなをかゞり火のかげハさわげる

ゆれハ深くちぎる心也　細　花鳥説可然明石
上のていひ給ふを我身の下の思ひハなると
さうするゝと也落句おもしろし
○これうきわし　弄　そへし思ふかな世中を
そむきたまふのこそうせるまじきん
細　花鳥源氏の御心を明石上の根ならぬと云ふに
是ハ源氏の根なるべし
○ふるきさうへ花さうの御堂にて御念仏給
とておはしとふれハ大井へ志きくと渡給ふよし
女君ハおもひまされけると也
○まされきんとて　或抄　明石上の心を地より云也

これきゆとをしへしらと
ゑゝ分きゆづれにおぼさ
るこゝろれバこゝろをも
に恋よりて例ならぬ思ひへ
ゆるやかもし　おもひわずれきん
しらず